

## 自由論題5 「インドの開発」

### 報告2

和田 一哉 (長崎県立大学)

開発のための「参加」とは？：インドのマイクロデータを用いた実証分析

What is 'Participation' for Development?: Econometric Analysis of Microdata of India

本研究では開発における人々の「参加」の効果を検討する。ここでは、特に女性の家計内意思決定過程への「参加」についての認識が自らの認識のみに基づくものなのか、あるいは他者の認識においてもそうなのか、という点に注目する。便宜的に前者のケースを「主観的参加」、後者を「客観的参加」と呼ぶこととする。より詳しく言えば、意思決定過程に対する関与についての女性個々の主観的な見解と客観的事実との乖離、そして子供の厚生に対してそれらがいかなる影響をおよぼしているかに関して検討することが本研究の目的である。

近年、開発における「参加」の重要性が注目されるようになり、途上国の家計データの蓄積が進むとともに、「参加」に関する調査項目も増えつつある。ただし多くの場合、これらは調査対象者である彼ら個人の人々の意見に基づいているため、客観的な事実というよりは、主観的な認識にとどまるものであると考えられる。

経済学において、功利主義的アプローチは社会状況を評価する際、個々の効用、すなわち幸福感や満足度といった精神的側面に注目する。それに対しアマルティア・センは、精神的側面に依存する評価方法では不十分であると批判している。しかし一方で、ダニエル・カーネマンやアンガス・ディートンのように、人々の主観的認識も有用である場合があることを指摘する先行研究も存在している。開発における「参加」という文脈で、これに関する実証研究はほぼ皆無であり、いずれが有用であるのか、あるいはともに有用であるのか明らかではない。

そこで本研究では、女性に対する抑圧の厳しいインドの大規模家計データを利用し、家計内の意思決定過程に対する女性個々の「主観的参加」と「客観的参加」との乖離、そして子供の厚生に対するそれらの影響を明らかにすることを目標とする。加えて、本研究で注目する「主観的参加」と「客観的参加」が真に意味するところについて、再検討を行う。